

Title	フランス革命時代の知識階級
Sub Title	
Author	小泉, 順三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1932
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.4 (1932. 4) ,p.604(90)- 633(119)
JaLC DOI	10.14991/001.19320401-0090
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320401-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランス革命時代の知識階級

小泉 順三

一
フランス革命前における宗教批判は政治批判に轉向した。祭壇迄押寄せて來た波濤は、それを越へるに多くの努力も要しなかつた。テイヌは云ふ、祭壇と王位との距離は短かつたからと。

王の周圍には、最早蟻の歩みも聞へる静寂さは嚴守されなくなつた。三代に歴任したリシュリュー將軍は、ルイ十六世に向つて次の如く云つた。「陛下よ、ルイ十四世の下では誰一人も一語も發しませんでした。ルイ十五世の下では、人々は極めて聲を低めて語る様になり、陛下の下では、極めて高聲に語合ひます」と。正に其通りであつた。

十八世紀の後半に及ぶや、インテリゲンチヤの活動範圍には、一つの視野が加つた。彼等は、宗教批判から政治批判への方向轉換を試みたからである。

私は一七五〇—一七八九年を第三期として分類したが、この時期には次の如き二特色をあげる事が出来る。

その一つは、前期に於ては、僧侶を助けてインテリゲンチヤの宗教攻撃に壓迫を加へて居つた政府が、この期以來、自ら公然たる敵意を教會に示すに至つたといふ事である。

他の一つは、十八世紀中頃迄は政治組織を攻撃した著者は一人も見られなかつたのに、この期以來有力な著者は、不斷に其筆を政治問題に向けたといふ事である。

勿論、この二つの變化がしかく確然と行はれたのではない。この劃期は、たゞ其傾向の顯著な變更を示すといふ意味である事、多くの状態がこれを總括的に保證してゐるといふのである。何故かなれば、人類の歴史に於て、或る智識的變化が何時から行はれたかといふ様な事は其性質から推して、完全に指示し得ないものであるからである。

二

先づ第一の場合について、政府の宗教攻撃參加の經過を説く事にしよう。

バックルは、宗教問題に對する政府の態度の變化の理由及動機について、何等の説明も與へてゐない。又、ジャン、ジョレスが「フランス革命の社會主義史」にもこの事に關する説明はない。が、カウツキーの「フランス革命時代に於ける階級對立」に於ては、これに對して、次の如き明確な意見が與へられてゐる。

即ち、カウツキーは、十八世紀後半に於ける啓蒙哲學者の峻嚴極まる攻撃は、教會の腐敗し盡し、老疾し切つた封建的形式に向けられたものでなくして、その近代的諸關係に最もよく適應してゐる所の形式に向けられたものである、と云ふ見解を持つてゐる。

土地所有の上に基礎を持つ古い封建的教會組織は、フランスに於ては、ずつと以前から國民的なつて居つた。すべて、法皇ではなくして、國王が其樞要機關を任命し扶持を與へた。そして、それが殆んど例外なく、貴族の仲間に限られて居つた。

然し、教會組織には、王の手中に存せずして、法王の手中にのみ存在するものがあつた。この點に對する利益の衝突が、王及び貴族をして、又政府をして、ブルジョアに左袒し、宗教に叛かしめたのであると、カウツキーは認めてゐる。(カウツキー著、フランス革命に於ける階級對立六〇頁)、外國人たる法王は、教會の豊富な収入を勝手に所分した。然るに、この僧團は國際的のものであるから、この収入は、單にフランス人ばかりでなく、イタリヤ人、スペイン人、ドイツ人等にも利益を與へた。従つて、この収入は特に特權者のみの利益には役立たなかつた。

僧團が、かくの如く、貴族にとつて歓迎すべきものでなかつたと同様に、ブルジョアにとつても又そうであつた。

何んとなれば、僧團は、近代的商業的手段に於ては、ブルジョアに對する極めて有力な競争者の立場にあつたからである。彼等は世界の到る處、支那、日本、メキシコ、ペルーに到る迄、傳道師と代理商とを兼ねた特派員を放つて居つた。

彼等は、常に歐羅巴に於て商賣する丈ではなく、植民地の搾取を系統化する事も知つて居つた。そして、又、植民地から單に掠奪や取引や獨裁經營によつて利益を引出すのみでなく、土民を製糖工場等の工業的企業に使用する事によつて利益を引出した、最初の歐羅巴勢力であつた。従つて、

ブルジョアと宮廷貴族とは、彼等のこの共通の敵に對して、啓蒙哲學を武器として極めて峻嚴な攻撃を向けたのである。

誠にカウツキーの云ふが如く、政府と貴族、ブルジョアと其理論代表者たる知識階級が、聯合して僧侶に對抗するに至つたのは、恐らく、この近代的商業關係によつたものであらうか。

これは確かに理由となるべきであらう。然し、これが其理由のすべてであるとは云ひ難い。

この攻撃の一部は、少くとも僧侶の封建的形式に向けられたものであることを認めるべきである。即ち、當時の知識階級の激しい理性の聲に動かされた。王及政府當局が、社會制度の改良に對して、漸く自發的に參加し初めたからであると認める事も、又可能なのである。

フランス革命を生んだ十八世紀のフランスに於て、王及政府が、何等社會の改善に對して、人民の幸福に對して、注意しなかつたと思ふ人があるならば、それは偉大なる誤謬である。革命に最も近いルイ十六世の治世の如きは、殊に、人民の幸福、社會の改善に對して注意を拂つた治世であつたのである。

事實、ルイ十六世の治世には、それより以前の治世とは異つて、治者の頭腦に人民の生命と自由の尊重と云ふ目的が積込まれて居つた。そして、これと同時に、社會全體の繁榮は、かつて其例を見ぬ程の速力を以つて、産業方面に於て發展し初めて居つたのである。

然らば、人は反問するであらう。かくの如き善政の時代にあつて、何が爲に革命が阻止され得なかつたのかと。

トックヴィユはこれに答へて云ふ「我々はかゝる變則に驚く。然しこれと同一の現象は歴史上に豊富に存してゐる。革命は、悪よし最悪に赴く次第的傾向によつて招來されるものではない。忍耐強く、且殆んど無意識に最も壓迫的な壓迫に耐へた國民は、其壓迫が輕減され初めた時に、屢々其拘束に對する暴動を爆發せしめるものである。(Tocquvielle, Ancient regime and French Revolution. p. 215-216)。

長期に亘る壓迫の後で人民を救はんとする王は、彼が偉大な天才でない限りは、其好意も努力も一切を徒勞に費して了ふものである。それらの弊害を、不可避のものと思ひあきらめるがために辛抱するのであるが、一度、それが可避のものであると云ふ事が示されれば、治者の好意に反して人民は、これを破壊しやうとするものなのである。しかも、當時要路に立つものに確たる社會的見解を有するもの、殆んどなかつたと云つてよい位の狀態であるに於てあや、と云はねばならなかつた。其上當時に於けるこの産業の發展こそ、實に、社會改良たらんとし、又然かるべきことを餘儀なくされて居つた主なる被治者、ブルジョアジの膨大な實力増進を示すものに外ならなかつたのである。かやうな理由で、私は、カウッキのあげた理由と相並んで、教會の封建的形式に對する憎惡と、改革の要求の増加したため、政府も又、宗教攻撃に其一步を進めたのであると解する。

實際的に見て、政府の宗教攻撃は年代的に何時から初つたかと云ふに、それは、一七四九年に初めて最初の具體的決定的手段をとつて現れてゐる。(Buckle, The History of Civilization in England, p. 332). この新政策の創始者である名譽を負ふたものは當時大藏大臣であつたマシオウル(Machault)であ

つた。彼は、一七四九年八月に、詔勅に適法に表示され、且バールマンによつて承認され併せて王の同意を経ないでは、如何なる宗教建築も建てることを禁止した勅命を發した。

シスモンデイの記する所によれば、この法令によつてマシオウルは、僧職階級の財産の増加のみならず、その存在さへも王國の罪惡と認めたのである。

しかも、この所置は、フランス政府にとつて計畫の單なる手始めにすぎなかつた。何故なれば、政府は、僧侶の財産に課税すべき時の來たことを覺つた宮廷の意思を代表したマシオウルに、引繼ぎ大藏大臣の印綬を授けたからである。

この時から革命に至る四十年の間、これと同一の僧侶攻撃を行つた中で、特に有力な人をあげれば、Choiseul, Necker, Turgotの三人である。しかも、これら三人の有名な政治家のみならず、Calonne, Malesherbes, Terrayの如き稍々下る人物も等しく、僧侶が迷信を利用して自己の勢力を擴張するばかりでなく、淫樂、奢侈に耽けるがために彼等の特權を悪用してゐる現状を攻撃する事を以つて専ら政治の要諦と見て居つたのである。

他方宗教内部の論争は、政府をして、更に他の手段を採用せしめた。從來、危險思想と目されて政府が罰して居つた信仰自由の學說に、政府が好意をもち初めた事がそれであつた。

この點に關しても舊教徒の迫害に對して新教徒を保護する意思を示した最初の大臣は、マシオウルであつた。ルイ十四世の死後、急に勢力を得たジャンセニイストは、これに力を得て、教會内部に於けるゼスイットの勢力を壓倒し去らうとしつゝ、あつた。當時の有名な政治家は、殆んどすべて

ジャンセニストの後援に立つた。ネッカー、及ルソーの如きはその中のすぐれた支持者であつた。思ふに、政治家がすべて懷疑者であり、神學者が、カルベニストである時代にあつては、權威と傳統の最後の擁護者であるゼスイットの一派は、當然滅亡すべき運命にあると云はねばならぬ。従つて、このためには、何等特別な事件の發生を必要としなかつた。僅かな一少事件がありさへすれば、政府は彼等を彈壓出来たのである。

即ち、一七五七年にダミアン(Damiens)が王を暗殺しやうとした事があるが、ゼスイットは其行爲の煽動者であると一般から信ぜられた。この推定は事實偽であつたが、かゝる噂の存在は、人心の歸する所を指摘するものである事は明白であつた。かくして、一七六一年八月にはゼスイットは新しい歸依者を容れる事を禁せられ、大學は閉鎖され、彼等の著作の多くも公然と焼却された。次いで、翌一七六二年には、更に勅令が發せられ、抗辯する事なく善良なる國家に参加する事を許すに不適當であるといふ理由の下に、彼等は有罪の宣告を受け其の財産は賣却を命ぜられ、建物と團體とは公式に廢止されて了つた。

然らば、彼等の罪惡はしかく重大なものであつたかと云ふに、前述した如く、全くそうではなかつた。彼等は國家に對して陰謀を企てたと云ふのではなかつた。彼等が、公の道德を腐敗させたこと云ふのでも、又宗教を改革しやうと欲したのでもなかつた。十八世紀に於て必要な事は、何かつまらぬ事件であつた。そして、それが既に國民の決定した事を正當づける口實に役立ちさへすればいゝのであつた。従つて、この大事件を一商人の破産や、一主婦(ボンバズール)の陰謀に歸するとい

ふのは、正しい觀察でなかつた。十八世紀の人の眼には、ゼスイットの眞の罪惡は現在よりも寧ろ過去の事に屬し、且古代制度の罪惡を辯護する事によつて、人類の進歩を阻害したといふ事にあつた。(Buckle, op. cit. p. 347).

ゼスイットの廢止は新教徒の興隆を意味しなければならぬ。

一七八七年、即ち革命前僅か二年に、トゥルーズの天司教であるブリエンヌは、突然新教徒に舊教徒と同等の權利を與へる勅令をパリのバルマンに提出し、バルマンは常に王權に對して強情であるに拘らずこの勅令の承認に對しては躊躇する色すら見せなかつた。

然し、ゼスイットの滅亡後教會の衰微も又不可避の事實となつた。

フランスの教會には、自己を破壊から救ふ何等の準備も要求もなかつた。何んとなれば、智識の進歩と社會の發展は、教會を守る人々の中の最も重要な部分、換言すると、中位下位の僧侶を擧げて、ブルジョア階級及革命家の群に走らしめたからである。

其雄辯を以つて、世に聞えて居つたフランスの僧侶の聲も、徒らに殿堂の空虚なる天井にひびくのみで、かつては堂に滿ちた群衆も今は其姿をかくして、恰も荒廢するがまゝに廢棄せられた劇場の如く見えた。

三

かくして、殆んど倒壞するにまゝたる姿を見せて居つた教會及僧侶が、十八世紀後半から革命直前迄、ともかく、其餘命を保ち得たのは、フランスの智識階級の主たる攻撃力が、宗教界に其

興味と尖斜を失ひ、専ら政治方面に向けられて居つたからである。

換言すれば宗教攻撃を略々終つて十八世紀後半に及んだ智識階級は、この頃からして、愈々根本的なるものに觸れ初めたのである。

智識階級はかくして、漸く其轉換の途を發見して、宮廷が一切の不幸の支柱であり且進歩の一切の障害の支柱である事、宮廷こそ、人民搾取の張本人である事を明白に自らも知り、又人民にも知らしめんとしたのである。

この政治批判は、今迄宮廷に多數の思想家及研究家を従屬せしめて居つた紐帶を解き、インテリゲンチヤの大衆及其指導者の數を俄かに増加せしめた。

この自覺が多數のインテリゲンチヤを社會の表面に浮上せたと云ふ事は、重大な効果を有するものであつた。何故かなれば、この智識階級の大衆が有する偉大なる購買力は、政治的書物、經濟的書物をして、専門に販賣しうる商品にしたからである。勞働生産物が、個人を對象とせず、社會を構成する多數、即ち民衆を對象とする場合に於て初めて、其勞働者の社會的獨立的存在が發見し得られるものである。今の事實は、ブルジョア哲學者、ブルジョア文學者が、最早宮廷の安全や施與に俟たず、今や不充分ながらも、ブルジョアジエの利害の代表者としての獨立した生計方法を見出したと云ふ、智識階級の經濟的獨立と解放とを示すものであつた。

かの百科全書の如きも、其功績は云ふ迄もなく、智識の偉大なる體系化にあつたが、他面にはそれ以來文學者の職業を確定獨立したものとした他の功績を有するものであつた。其の編輯者たるデイデロ、及ダンペールは、二人とも貧乏ではあつたが、決して食客ではなかつた。彼等はバトロンを求めなかつたし、又ヅルサイユの名にあこがれ、徒らに幻想を夢みることは決してなかつた。(Marely, Diderot and the encyclopedists. vol. I. p. 129).

一言にして云へば、智識が自ら生きる可能性を知つたのであつた。智識の民衆化は、書籍市場に相並んでより廣い購買力を期待し必要とする雑誌新聞パンフレット業を起さしめた。

アーサー、ヤングの手記によれば、當時パリに於けるこの種の出版物の公刊はすばらしいものであつた。彼は、一七八九年六月九日に次の如く書いてゐる。

「パリーのパンフレット店で現在行はれてゐる商賣は信ぜられぬ程である。私は、何か新しいものが發行されたかどうか見たいと思つて、又、全部の目録が欲しかつたので、バレー、ロワイヤールに行つた。始終何か新しいものが出てゐる。今日は十三出た。昨日は十六、先週には九二出でゐる。我々はロンドンの Dabrett 店や Stockdal 店が混雜してゐると思ふことがあるが、この Dessein やそこの店と比較すれば、全く沙漠見たいである。こゝでは、店頭から帳場迄身動きも出来ない。その価格は、二年前は一つ二十七リブルから三十リブルからであつたが、今では六十リブルから八十リブルである、云々」(A. Young, Travels in France. p. 153)

この出版者の多くは、二十の中十九迄は、自由思想に好意をもち、概して僧侶及貴族に對して烈しい反感を有して居つた。然るに、宮廷はかゝる多くの出版物の奔放な立論を何等制禦しなかつた。

ヤングは亦この放任振りに奇異の思を抱いてゐる。

而して、かゝる民衆の智識的啓發を助成する、他の機關が異常なる發達を遂げて居つた。この種の印刷物、雜誌、パンフレット、新聞紙を備へつけた民衆的集合娛樂機關たるクラブ、及カフェーがそれである。

ルイ十五世の治世にサロンが、其時代の反動性とフランス人の嗜好に投じて隆盛を極めた事は既に述べたところであるが、サロンは、尙そこに存在する貴族的雰圍氣のために到底より大なる民衆性を有する事が不可能であつた。十八世紀迄はカフェー、クラブの如き階級混合機關は全く存在を許されてゐなかつた。

なんとすれば、各上層階級は、下位の階級に對する優越感に於ては甚だ堅固であつたからして、平等の條件で會合するといふ事は、到底及びもつかぬ事とされて居つた。二十も祖先を逆する事可能なる家は後世の我々には想像出來ぬ程の尊敬を受けて居つたのである。然るに前述した如く、十八世紀以來、この原則が次第に侵害され初めたのである。智識の進歩は智識優越と云ふ新原則を樹立し、この原則によつて、貴族的優越に對する攻掠運動が開始されたのである。この侵掠の最初の形がサロンであつたのである。

然し、それにはより大なる民衆化を要求する社會の進展的需要に適當するには尙あまりに貴族的趣味が多かつたのである。

一片一片にそれを透して、人間性の社交的傾向を助長刺戟する本質的事實を含んでゐる喫茶、喫

煙、集合、會話を綜合的に最も容易に行ひうる機關が、サロンの形式から生れ出なければならなかつたのである。平民的サロンとして、この民衆の要求のために出現したものが、カフェーであり、クラブであつた。革命の大立者であつたミラポール伯の如きは、ネッケル夫人のサロンで排斥された一人であつたといふ事を附言すれば、カフェー、クラブの成立した理由がよく短的に了知されるであらう。フランス革命をカフェー對サロンの争と見る事も出来る、或人は云つてゐる位である。

カフェー、クラブの民主的性格は、當然それを政治的のものとした。あらゆる階級が政治問題を論議するこの問題を姦しく論議した事は云ふ迄もない。一七八七年に、あらゆる階級が政治問題を論議するこの故を以つて、主たるクラブ全部を閉鎖すべしと云ふ命令が發せられたが、これは云ふ迄もなく、不可能な事であつた。この命令は何時か取消されて、クラブの進展は何等妨げられなかつた。

クラブには、特別の會館をもつもの、珈琲店の一室を借りて會場とするもの、一定の場所を定めず、隨所に自由に會合するもの等があつた。クラブは英國の風に倣つたものであるが、其の當初に於ては、何等政治的色彩をもたず、文學を談じ、社會の時事問題が話柄とされて居つた。革命の開始と共に數多くのクラブは一時に勃興して、到る所で盛んに時事の討論が行はれた。例へば、Club Breton はブルターニュ州選出の代議士の集會所となり、國民議會が開會せられた時には、Rue St. Honor にあるドミニカン派の律院、サン、ジャコブの一室を會場としたにちなんで、ジャコバン、クラブと名づけられた。このクラブでは、初め Club des Anis de la Constitution と云ひ議員以外にも會員となつて居るものもあつた。然るに、小クラブは漸次大なるクラブに吸収せられ、終には、

其一部にすぎなかつたジャコバンクラブが其名を擅にするに至つた。

この外有名なものとしては、コンドルセーの率ひる Lycee クラブ、ブリッソーの Société des Anis des noirs等があつた。

中等以下の人々は、これと別に平民的な會を組織し、貧民長屋の階上、又は街上所を撰はず、貧窮の學生、議論好の職工等が集つて演説するものもあつた。

又、各區の選舉人會は一勢力をつくつて居つたから、これを中心とした會が各區に組織されて居つた。この選舉人會は、主要な區に於ては、純粹な選舉權所有者の會合であり、専ら中等社會より成り、議會に對して同情を有して居つた。

然し、フォブルグ、サン・モルソー、サン・タントアージュの如き貧民窟には、選舉權の有無に拘らず不平の徒が集合した。殊にモルソー (Morcau) にはジャコバン、クラブの支部たるユルデリエー (Cordelier) があり、ダントン、初め過激なるジャコバン一派の一揆製造所となつた。

又、バレー・ロワイヤールの内庭は、コーヒ店、酒場等に圍繞せられて居つたのと、野心のあるオルレアン公の邸内であるとの理由で、こゝも、一揆の噴火口となつた。

アーサー・ヤングはバレー・ロワイヤールの中のカフェーの光景を寫して、危険なる出版物に何等制限を加へられてゐないよりも、尙奇怪なる事であると記してゐる。彼がそこで見た所によれば、人々はカフェーの内に群つてゐたばかりでなく、事あれかしと待構えてゐる群衆は、扉や窓に立つて、各自の小さい聴衆に、自分の椅子やテーブルから演説してゐる某々の演説家に、心を傾けて聽

入つて居つた。其聴衆の熱心さ及現政府に對する烈しい非難のあらゆる感情に對する彼等の雷の如き拍手喝采は、容易に想像を許さぬ程であつた。(A. Young, op. cit., p. 153-154) の種の演説家の一人であるカミーユ、デュムランが、如何にしてこの熱狂した群衆を動かしたかは、我が箕作博士の麗筆によつて、或る迫眞力を以つて我々に示されてゐる。(箕作元八、フランス大革命史上卷參照)

註、コーヒ店は巴里の特長であつたが、眞に巴里に於けるカフェーの先驅と云はるべきものは、シリア人プロコップが、コメデー、フランセイメの前に、甘いカフェーをのませる店舗を開いたのに始つてゐる。この場所は當時の目抜の場所であつたので、忽ち、巴里社交界の話題となつた。續いて、シリア人のエチエス、アルメニア人のグレゴア等が土耳其の君府のカフェーを模倣して、大理石のコーヒテーブルを置き、日除を深くたれこめ、硝子張にして、冬は温く夏は涼しい喫飲と會話を享樂する新しいカフェー經營を試みた。これは主として、サン、タンドレ、デザール街を中心として居つた。これが、巴里のカフェーの先驅として知られてゐる「カフェー、キュージニエール」であつた。

カフェーは、かくの如く廣い意味の中等階級の集會所であり、こゝで彼等は新聞をよみ、時事を論笑する外、手輕に用務を辨じたのであるが、或る者は時間を消すために娛樂に耽り、賭博をするものもあり、中にも、將棋はこのカフェー獨特の娛樂として、非常に人氣があつた。ルソーも好んで將棋をさしたと云はれてゐる。モンテスキューのカフェーに關する記述はこの間の様子を記述したものであつたのである。ルイ十五世の治世には、巴里に六〇〇軒からのカフェーを數える事が出來たと云はれてゐる。

人民の行樂機關としては、カフェーの外に専門に酒をすゝめる店舗があつた。これはギニエット (Guignett) と稱された。これは、主として天幕張の小屋であり、内部には荒けづりの長い卓と腰掛

どを備へ、天幕の中央には舞踏場があつた。樂隊は絶えず賑かな樂音を立て、興趣を添えた。

郊外のギニエットは樹木にかこまれ、天井は樹の柵で作られ手広い構造をもつものもあつた。これはクローテイル(Colette)と云つた。それは樹木を植えた場所と云ふ意味である。王后は、かつて王弟アルトア伯に伴はれ、こゝに微行し、一生にかやうな愉快を経験した事はないと云つてゐる。後に彼女が不謹慎であると云ふ理由で、世人から指彈せられる原因に數へられた。

これらの集會以外に、當時に於ける輿論の勢力を知らしめるものは新聞及雜誌であつた。これについてはこゝに述べることを略する事にする。

四

かくの如く、社會をあげて政治や論議する聲の高まつた中に、特に我々の注意を惹いたものは、フランスに於ける經濟學の誕生といふ事であつた。

當時のフランスに、初めてこの組織的な政治理論が現れたといふ事實は、フランス社會が、國民全體に加へられて居つた政府の束縛を、精神的に形而上的に認知したばかりでなく、政府の干渉が一國の物的利益の上にもたらした莫大な損害を認知するに至つた事、換言すれば、ブルジョアジエの利害關係を、最も明確な數學と言葉で以つて説明する一學說體系の構成された事を示したものであつた。即ちこれによつて初めて、從來、形而上學的世界に浮動して居つたブルジョアジエは、實際社會に根を下ろす事が出来たのである。

ブルテールは、哲學辭典の小麥の項に於て曰く、「一七五〇年頃、詩、悲劇、喜劇、オペラ、小説、奇異

な物語、甚だ夢幻的な道德論及神慮や癡癡に關する神學論に倦いた國民は、遂に、小麥について考へ初めた」と云つてゐる。又彼は次の様にも云つてゐる。「事態がこのまゝ繼續すれば、我々の藝術は左様ならである。財政に關する忠告や計畫熱が國民を捕えた」と。

ケネーを中心とする人々、所謂フィデオクラットと稱せられる一派がそれであつた。

この重農學派を、純収益と自然秩序との二つを根構とするものであると云ふ狹義の立義によらず、コルベール主義に對する反抗及自由放任促進運動と解するならば、經濟思想上に於ては少からず見解の相違を見た多數の人々、グールネー、チュルゴー、コンドルセー、コンデイヤックさへもこの一團の中に數える事が出来た。

この學派の起源を探求して行けば、恐らくシュリー公に迄遡ることが出来やう。云ふ近もなく、この學派は、十八世紀に忽焉として現れたものではないのである。その起源を求めるために、シュリー公に迄遡る要はないとしても、シュリー公の尙農政策が残した傳統と、コルベールに對する反動に求めることは、何人も異論はないであらう。何んとなれば。コルベールは、或る經濟學者が云ふ如く、農業に對して特別に且組織的に敵對政策をとらなかつたとしても、彼の云ふところに適した政策は、手指の勞働から富を生じさせ様と欲したものであり、従つて、工業及海商貿易に最善の奨勵を與へたことは疑のない所である。然るに、この點こそ經濟學者の以つて非難せずにあかなかつた所である。(G. Weulersse, Le mouvement physiocrates, p. 1-3)

さて、フィゾクラット、或はフランスの經濟學者の一群は何を求めたのであるか。

彼等は、人間の産業組織を決定すべき簡単な公式の發見を目的として居つた。彼等は、人間の政治的諸關係を決定するために、ルソーが人間の權利に關する學說を樹立したと同様の努力を、試みたのである。彼等は、法則の簡單化のために、事物の本質に迄入らねばならなかつた。そして、其本質突入は、全然成功したとは云へないが、その努力によつて、人間の經濟生活の本質を或程度迄総合的に觀察したといふ事に於て、經濟學其のものに偉大なる貢獻を與へた。

彼等は、同時代の英國人とは、従つて、全く其傾向を異にして居つたといふ事が出来る。彼等を英國人と比較した場合の特異な傾向とは、外國貿易よりも寧ろ富の本源を探求する傾向、及び、中央集權化された政府を有する彼等の立場からして、より以上に組織的全體的方法を用ひる傾向とであつた。換言すれば、フランスに於ては、稍や煙草の多少によつて開港するかどうかといふよりも、全國民を養つてゐる富の本質は何んであるか、その分配状態はどうであらうかと云ふ、より根本的な疑問が提出されて居つた。

これに對して彼等は、土地の生産力に其解決を求めた。彼等には、農業が國富の本源であると考えられた。農業を、國富の源泉として保護すると同時に、それを助成するものとして、穀物交易の自由—經濟的自由—を主張した。彼等は廣大なる自由貿易説を主張する最初の人々となつた。

この點に於ては、サー・ダッドリー・ノースの如き進んだイギリス學者にさへも先んじて居つたと、マーシャルは云つてゐる。

そして特筆すべき事は、彼等の學說は、歴史的に見れば、ブルジョアジーの意見の理論的表現で

あつたが、彼等自身の立場から云へば、前述した如く、單に一商人の富を増し、國庫の財庫を満たすにあつたのではなく、富の本源的生成の理を究める事であり、且同時に極度の貧乏によつて生じた困苦と墮落とを軽減せんとするにあつた。(大塚金之助譯「マーシャル經濟學原理第一分冊三二三頁」)従つて、どうしてパンが高くなるのだらうか、何故に勞働者がかくも悲惨な状態にあるのか、凡ての土地が課税を支拂ふべきではなからうか、ある土地がその生産額以上に税を支拂ふのは正當であらうか、かゝる諸問題が彼等によつて分析された。しかも、これこそ、當時のフランス社會の要求によく適合したものであつたのである。

彼等の思想體系を論述すること、及これが史的研究は、革命への進展を知るに於ても、又フランスに於けるブルジョアジー精神の起源を求めるに於ても、重要なものであるが、その事はこれを他に譲るとして、然らばこの學派が革命に對して如何なる影響を與へたかと云ふに、これについては、次の如く、トックヴィユの云ふところを引用することが出来る、曰く「彼等は歴史上で哲學者よりも著名でない、革命の原因になつた點に於ても哲學者よりより間接的な影響しか與へなかつた。然し、革命の真相は彼等の著作に於て最もよく研究する事が出来る」(Tocqueville op. cit., p. 92)

哲學者は大抵政治問題について、抽象的で且總括的な理論を考究するに自ら限定して居つたが、經濟學者は、理論を取扱ふと同時に顯著な事實を指摘した。前者が、理想を供給したに對して、後者は改良の實際的計畫を供給した。彼等が、一一攻撃の矢を向けた制度はのこらず後に革命の手によつて廢止された。

そして、他方、革命によつて樹立せられたものは、すべて彼等によつて豫め主張せられたものであつた。政治問題と社會問題を取扱ふ、彼等の音調と氣質には、後の時代を豫言する點が多かつたのを我々は認める。

五

この新經濟學派の誕生と同時に、我々は他の一つの社會理論の萌芽を、こゝに發見する事が出来る。それは社會主義的理論である。

社會主義の起源については、各自學者史家は、其據るところを異にしてゐる。彼等が、社會主義其のものへ下す定義が異なるだけ、換言すれば、社會主義の定義の數だけ、社會主義の起源についても、異説を數へ上げる事が出来ると云つてもいいのである。

然し、大體に於て、近世社會主義の起源を十八世紀の後半に求める事は、甚しく誤ではない。何んとなれば、フランス革命自體は、全體的に見てブルジョア革命であるから、それに對立するプロレタリア的理論を、當時の社會全般の要求であると認める事は全く不可能ではあるが、それが社會制度に一大變革を與へ、近世の社會制度を確立したものである以上、個々の思想家の言論及著作には、屢々社會主義的理論が意識的に又、無意識的に、長く或は短く、説かれてゐるのを發見するからである。

トックヴィユは次の如く述べてゐる。

「社會主義の名によつて知られてゐる破壊的學説は、近世的起源のものであると一般に信ぜられてゐる。これは誤謬である。これらの學説は、早期の經濟學説と同時代のものである。彼等の或者が、社會の形態を變改するために、彼等が建設せんと希望した絶對權力を使用したいと思つたに對して、他のものは社會の根本的基礎を破壊するために、それを使用せんことを提議したのである」と (Tocquvielle op. cit, p. 199)

従つて、彼によれば、中央集權主義と社會主義とは同じ土から生れたのであるが、一つは野生の雜草であり、一つは花園の育ちであつた。この説の當否は措くとして、事實或者は財産を攻撃し、それに基礎をおく社會制度を攻撃し、それによつて生じた不平等の起源をさぐり、又或者は、利己主義を禁ずるために財産の共有を提唱し、嫌忌すべき所有權の再建を望むものを人道の敵と稱し、「狂亂者」として牢獄に終身禁錮すべき共和國の建設を夢みた。

テイヌをして評せしめると、これらの企は誠に果敢ない望であつたと云つてゐるが、これを、最早哲學者に非らずして、經濟學者であり、政治學者であつたブルジョア思想家が、益々人民の味方として自己を表現し、僧侶貴族に對してのみではなく、「富者」一般に對しても益々敵對的に自己を表明した證左と見れば、我々は十八世紀後半に於て、フランスに於ける知識階級の異常な勝利を知る事が出来やう。

かくして、約一世紀に亘る永い經歷を得た知識階級は、一七八九年迄に、その云ふべき事、云はんとする事すべてを吐露して了つたのである。

彼等によつて十八世紀に行はれた、人類精神の活動を綜合して見ると、その精神の大膽さに驚か

ざるを得ない。

我々は、個々の思想家に於ても、又一つの傾向としての思想に於ても、十八世紀の人類精神が全社會状態を厭忌し、或は輕視して、敢然として進軍してゐるのを見る。十八世紀とは「制度、輿論、風俗、社會及人間そのもの、即ち一切のものが改革を要求する様に見える、さうして人類の理性が自ら進んでこの事業に當つた」世紀であつたのである。(Guizot, History of civilization in Europe, p. 370)

然し、智識階級はこの事業を進行するに當つて、社會全階級のために、純真無雜は智的活動を行つたのではない。彼等は、時代の要求するところに従つて、第三階級の見解の下に一般人民の理性を啓發するに努めたのである。一時代に於ける社會的正義なるものは、その時に最も多くの要求を存するもの、換言すれば、其時代の要求するものを代表して要求する社會の一階級の主張である。一七八九年に於けるフランス國民一般の要求するところでは、別に論じた如く、近世の社會主義的のもの、即ち第四階級のものではなく、中流階級、特に町人階級の封建的束縛に對する近代的自由であつた。従つて、當時の智識階級は、搾取され苦惱しつゝあつた階級に對して十分の同情を有しながらも、彼等の生存條件社會的地位、家族關係等によつて、彼等の所屬して居つたブルジョア階級の限界を超越し得ないと云ふ矛盾に平然として居つたのである。

然し、彼等は幸にも何等營業的資本に利害を感じる立場になかつたがために、それから生じるブルジョア階級特有の狭量からは完全に獨立して居つた。そして、この超越的立場に於て、他面、十

八世紀に於ける下層階級の理性の叫びをも完全に代表し得た。即ち、彼等は物質的利益の代表者としてではなく、單なる原理の代表者として、純粹理想の代表者として、自らの無智を誇りつゝ國家をば自己の其時の企業のために利用することを望んだ資本主義的實際家に對する理窟家として現れたのである」(カウツキー著、前掲書、六四頁)

とまれ、十八世紀の後半に於ける人類精神の躍進は偉大なものであつた。ギゾーも驚嘆して云ふ、かつてかゝる大膽を人類精神が示したであらうか？

世人は、稍もすると、この大膽さに驚嘆するあまり、國民議會に於けるミラポールの舌端火を吐く如き獅々吼に思を馳せ、たやすく、そこに英雄的人間の存在によつて完成され遂行された一場の革命畫を書き勝ちである。が然し我々は革命がすべて、大臣の布告や議會の討論と決議だけで作りあげられたものとは決して信ずべきではない。國家的行政及立法によつて完成された點から革命を見てのみ、それは正しく、インテリゲンチヤの事業ではあつたが、本項の冒頭に於てのべた如く、革命をつくつたものは依然として、第三階級の意識と要求であつた。そして、この第三階級の理論的半面が革命に於ける智識階級の正體であり使命であつたのである。

結論 革命と古典精神

私は最後に、十八世紀の哲學に關するテイヌの觀察をのべて、本稿の結論にしようと思ふ。

十八世紀の終りに二大勢力、二つの革命力は、人心及事物を奮起せしめ、係數的に事變の狂暴さを増した。

即ち、一方に於て、フランス國民は智的成熟期に到着し、他方に於ては、フランスのブルジョワジイは社會的成熟期に達した。自己の偉大さを自覺したフランスの思想家は、その分析的演繹的方法を全實在に、本然のままの社會に適用しやうとした。之に對して、ブルジョワジイは彼の力、彼の富、彼の權利、彼の發展の殆んど無限な機會とを自覺するに至つた。一言にして云へば、ブルジョワジイはその階級意識に到着し思想家は世界意識に徹したのである。

これこそ革命の烽火の二つの源、熱烈なる二つの泉であつた。そして、これによつて初めて、革命は可能の事實となり且人を眩惑せしめる一大事變となつたのである。

かゝる見解こそ、革命に與へられた最も妥當な觀察でなければならぬ。

然るに、有名な革命史家たるテイヌは、甚だ一方的な觀察しか革命に與へてゐない。

テイヌはフランス革命に關して經濟的研究を等閑視して居つたばかりでなく、革命に對する彼の所謂「古典精神」なるもの、活動にあまりにあやまつた觀察を與へたからである。

テイヌによれば革命は全く抽象的のものであつた。

彼は、當時のフランス國民を、第一階が迅速に完成されるや否や公開された塔に上り、たゞ天空と空間のみならず、その前面と周圍と地上とを見て、住んでゐる國を知らんことを建造者にすゝめられてゐる公衆にたとへてゐる。

彼は、この比喩に持ち出された公衆が、確かにすぐれた見地に立つてゐる事は認めた。然し、この公衆が正確に觀察すると云ふ論斷を保證する事は拒んでゐる。然らば、フランスのこの公衆は、

どんな認識形式を有して居つたのであらうか。

テイヌによれば、この認識の一定形式が古典精神であつた。そこからこの世紀の哲學と、大革命の思想とが生れたのであつた。

古典精神の成立は、正統王朝と氣品ある會話の成立と略々同時代であり、之と偶然的ならず本質的に隨伴した。

古典精神の活動の結果、論文は概括的表現のみから成立し、他面冗語が削除されるにつれて、益々言葉は精確になり、選ばれた語彙に限局され、極少數の事物を語るばかりになつた。雅致と正確この二つの語は、フランスのアカデミーと共に生まれ、サロンとともに育つた。

テイヌは、この文體から、次の如き二つの智的作用を窺知する事が出來た。第一は事物に直面し、多少正確、完全、深奥な印象を受け、次は事物を離れ、その印象を分解し、分類し、配分し、多少手際よくこれから導かれた觀念を發表する。

古典精神は第一よりも第二に於て一層成功した。この結果、すべて一種の人間、しかも、その何れも皆半架空的な人間が作り上げられた。モンテスキューのペルシヤ人、モリエールの召使や下男、ツルテールのバビロニア人、印度人に至る迄、この風が現れてゐる。

結局、すべてを受入れ包容する能力は當時欠缺して居つた。取除きうろ限りのすべての排除された。そして終ひに壓縮されて拔萃蒸發せし殘物、殆んど空なる名前、概言すれば、所謂空虚の抽象丈しか残されない。こゝに古典精神の特質があつた。

テイヌは古典精神をかくの如く解する事によつて、フランス革命は、一般的であるが茫漠とした平等とか、人類とか、権利とか、人民主権とか、進化とか云ふ、殆んど無なる概念に導かれたものと決論した。そして、それと同時に、フランス精神から鋭い且復雑した現實を失はしめたのがこの古典精神だと考へたのである。(テイヌ著、革命前のフランス、松木修重譯、二〇七—二二七頁、参照) ジャン、ジョレスは、テイヌの以上の觀察に對して、其誤謬を指摘してゐる。ジョレスは、テイヌは古典的精神が何んであつたかと云ふ事も革命が何んであつたかと云ふ事も知らなかつたと云つてゐる。

ジョレスは、第一に、古典精神と科學とを對立せしめるところに、テイヌの誤謬を發見してゐる。

ジョレスは云ふ「テイヌは根柢に於て誤つて居つた。先づ、彼はあやまつて、最も專斷的な抽象によつて、科學を彼の所謂古典精神なるものに對立させた。」と (J. Jaures, op. cit., p. 50) テイヌは、十七世紀及十八世紀に發展した科學について莫大な贅辭を呈した。科學は、人間に宇宙の構造、その量、宇宙を動かし、且宇宙を聯絡する世界的法則を教えた。

科學は、土地とは何であつたか、その位置、形狀、廣さ、運動、起源と覺しきもの、理を教えた。科學は、人間の眼前で、生活が無數の形に區別し初めた。そして、今日迄誇りに孤立して居つた人間自體に、人間と云ふものは、生物の長い繼續の一部を作つて居つた事、それは、一つの芽であつて、遙か後に生命の偉大なる木となるものであるといふ事を教えた。更に、科學は、人類社會

を解剖し、社會生活の秘密を見つけ様とした。そして、富、地代、價值、生産等の經濟現象を分析しやうと企てたのである。

要之、蒼空に於て漸く識別し得る遠距離の星の運動から、製造業に於ける新職業の活動迄、科學は一切を了解し、一切を自然自體の法則である、繼續的法則として發展せしめやうと試みたのである。これこそ、十七世紀及十八世紀の學者の行つたものであつた。

テイヌによれば、この「理性による社會人心の教育」は、古典精神のために、其行く所を誤らされたと云ふのである。即ち、堅實精確な科學は、サロンによつて、最初、稍々發輝せられたが、次いで集會やクラブに於て變造された。こゝに革命の虚榮があつたと。

然し、テイヌは、如何なる解剖術によつて、近代科學と古典精神とを分離し得たのか。ジョレスによれば二つのものは聯絡し且一致した力であつた。

古典精神は各觀念を分析し、皮相的なもの、或は、偶然的のものを省除し、それから、一切の必要要素を、最も自然的で論理的で、且最も明確な秩序に於て、排列するに存するものである。

然るに、この方法、この單純化及聯絡の慣習は、自然及生命の無限に亘る複雑を簡單にするものであり、宇宙の科學的征服を計るためには、人類にとつて必要であつたのである。

人間は空想の奇怪な魅力に誘惑されないと云ひ得ない。ハムレットの様に、無言の推知によつて、世界の神祕に入込みやうとしたり、又眞晝の夢の如く、「あらゆる哲學から逃れた天と地の神祕」をさぐらうとするかもしれない。然し、人間が宇宙の主となりうるものは、詐術や狂愚や空想による

ものではない。経験と理性とによつて、観察と演繹とによつてのみ可能なのである。考證と傳統から離れるためには、我々はあらゆる種類の問題から、あらゆる種類の事實から、最も普遍的な概念を抽出しやうと企てるべきであつた。我々は、かくの如き方法の下にのみ、最大多數の事物を集める事が出来、又最も廣く、且最も簡単な概念を求める事が出来るのである。

こゝに發明の方法と、科學の探求方法があつた。そして、この方法こそ、古典精神の發表及證明の方法と一致して居つたのである。

従つて、かゝる見地からジョレスは云ふ「私は、どうすれば兩者を分解出来るかと考へて見たか無駄である。テイヌが、兩者を相互對立させ得たのは、口舌を弄して自分の考を満足させる小兒のいたずら心に似たものによつてである」ニュートン、リンネ、ラブニス、モンテスキュー、デカルト、パスカル、何れもこの方法に於て一致してゐる。「要之、テイヌ氏は、科學自體を非難することなしに、古典精神及革命精神を非難し得ないのである」と。

思ふに、十八世紀が聖ベノア會の古文書に埋もれてゐる緩漫な理論、或は過去に關する穿鑿的な忍耐強い研究に限定されて居つたならば、宗教的、王朝的、封建的專制政治には都合がよかつたであらう。

フランス思想が、十六世紀の様に、言葉の放逸を極めて自ら慰めるを事とし、又ラベレエ風の散文の大筏の上で彼の叛徒を溺死させたならばすべての壓制者、特權者には都合がよかつたであらう。十八世紀が、ロマンテシズムの先驅となつて、古き教會の古き正門、或は古き城の古き塔を、甚だ

豊富な語彙を以つて事細かに書き上げたならば、僧侶、修道士、貴族には都合がよかつたであらう。

然し、古典精神のする仕事は他にあつた。それは、思想の自由なる源泉に、勞働の擴張に、個人の威嚴に反對する一切の迷信と壓制と特權とを、細かに、且怒の色を以つて指摘した。古典精神は、この争闘に於て、簡明質朴で強靱な言葉を必要とした。従つて、それは、感覺の過重と、言葉の好奇偏癈的な美しさを斥けた。かくして、敏活で感情の高ぶつて居つた古典精神は、あらゆる方面へ文化の矢を發した。そして、一切の現存組織を自然に反し、又理性に反するものとして排斥した。

單純な高い觀念に訴へなかつたならば、どうして、古典精神は時代に遅れた且雜然としたこの古い世界を破壊出来たであらうか。古典精神が、フランスから一切の隸屬と一切の慣習とを奪取する事の出来たのは、封建的權利の一つ一つを、僧侶の要求の一つ一つを、王の行爲の一つ一つを討議したからではないか。

ジョレスは、次に、テイヌの言に反して、古典精神は事實の精確さを必要とするも、又決して事實の正確、深奥な知識を排斥するものでない事を指摘してゐる。

テイヌは云ふ

「凡ての、精密な有益な事實は除外されてゐる。吾人は、禮節、優美、艷事、淫猥、社交的論議を見るばかりで、金錢の事を語り、數字をあげ、結婚や、裁判や、地方の管理に言及することなく、司祭、地方貴族、地方在住の修道院長、管理人、知事の有様、州、田舎、町人、商店、軍隊、兵士、僧院裁判所、警察、商賣、家政に關することは、盡く不明であるか、或は間違つてゐる。何ものかを明かに

するためには、古典の衣裳を脱ぎ捨て、臍を自由に動かし、凡てをあからさまに語る驚嘆すべきブルテールに立ち返らねばならぬ。社會の最も重要な機關や、革命を激發する法規や同業組合、親方、十分ノ一税夫役について、文學は殆んど語らず、サロンと文人とが恰も唯一の材料である様に見える。談話する上流社會の下に、フランスは全く虚無に見えた云々と」

こゝにテイヌの第二の誤謬がある。

フランス革命は、抽象的や空言的なものでは決してなくて、今日迄の革命中で、最も本質的な最も實行的な、最も平衡のされたものであつた。常に空想を抱き、無分別にして無駄な努力を費やしたものは、反革命の側にあつた。革命に従事した人々は、誠に、事實に關する深い智識と、彼等が投込まれた複雑な艱難についての恐るべき理解とを持つて居つた。従つて、革命の一寸した動搖にする意味があつた。一見すれば最も空想的と見へても、實際によつて導かれ、又歴史的必然性の證據をもたぬ一局面も存しなかつた。

先づ其時代の覺書に於ては如何と云ふに、國民議會及上奏覺書に認されてゐるプログラム程に廣汎に亘り、精細を極め、考慮を重ねられたプログラムの文句はなかつた。又それ以上に充分に、適當に決定的に實現されたものはなかつたのである。

次に、經濟的技術的狀態に於ても、何んたる研究何んたる努力が、この時代に拂はれて居つたであらうか。諸科學の、アカデミーは、一切の工業的方法と新發見について、壯大な文集を發刊した。小麦問題に、食料問題に關する覺書や、書籍は、正確で精細で不變な統計や、數字に富んでゐる。經濟學者は彼等の一般的學說を定めるに止まらなかつた。彼等の文集であるエフエメリイドに於て、

彼等は、毎日物價の變動、食糧、市場の狀況を記載してゐる。封建制度や、買戻の制度による封建的權利の廢止の實行的平和的方法に關する書籍や小冊子は、著しく増加してゐる。王室農業協會も最も有用な覺書を公刊してゐる。工場の檢閱官は、現代の勞働局が否認し得ない程の報告を政府に供給してゐる。

要之生活の細事について、全社會機能の精確な活動について、十八世紀以上に注意深いものは曾つてなかつた。そして、フランス革命程に、眞面目な研究によつて、豊富な考證によつて準備せられた革命は曾つてなかつたのである。